

# 遠藤新の「第三のもの」についての考察

—実作品との対比より—

望月 里奈

[指導教員：武庫川女子大学教授 黒田 智子]

キーワード：遠藤新, 自由学園明日館, 山邑邸, 甲子園ホテル, 建築論

## 1. 研究の目的と方法

遠藤新（1889-1951）による甲子園ホテル（1930）は、師フランク・ロイド・ライト（1867-1959）の作風を伝えるライト式建築といわれる。しかしながら師の帝国ホテル（1923）とは設計時期・条件も異なり、遠藤自身の獨創性が表現されていると考えられる。特に、2つのホテルの設計の間に遠藤が発表した「建築美術」（1926）では独自の建築論を展開している。それにもとづいて、甲子園ホテルにおける建築から装飾までの設計意図を読み取れると期待できるのではないかと考えた。

本研究では、遠藤新が「建築美術」で述べている「第三のもの」という考え方に着目し、その内容を定義と事例から考察する。次に、関連する実作品において「第三のもの」がどのように展開されているかを明らかにする。分析の順序を、表1に示す。

表1 分析の手順

完成年	対象	順序
1923	自由学園明日館の家具	2
1923	帝国ホテル	4
1924	山邑邸	3
1926	建築美術	1
1930	甲子園ホテル	5

## 2. 「第三のもの」について

### 2-1 定義

「建築美術」に載っている図<sup>1)</sup>を筆者が色分けして作成したのが図1である。遠藤によれば、二つの正方形の中にいかに魅力的な模様を描いてもそれは絵画的であって建築的ではない。（図1-A）「第三のもの」として、小さな長方形があって（図1-B）初めて相互に活かし合う関係が得られる。遠藤は、このような関係性を「建築的構成」と呼んでいる。

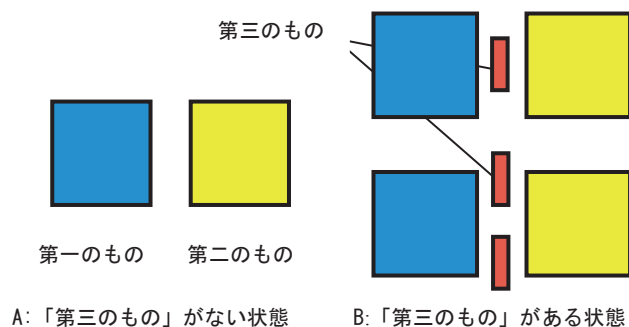


図1 「第三のもの」の定義

### 2-2 事例と考察

遠藤は「建築美術」において、「第三のもの」について様々な事例をあげている。分類して表2にまとめた。

表2 「建築美術」における「第三のもの」の事例分類

分類	事例
ストリートファニチャー	電信柱
庭	桂離宮の灯籠・手水鉢
建築	法隆寺の五重塔・鐘楼・経殿、薬師寺の塔、帝国ホテル
乗り物	ボート
衣類	着物・夏帽子
人体	顔

人体から始まり、衣類から建築・都市まで、遠藤は生活環境全ての中に「建築的構成」を見出そうとしているのではないだろうか。その意味で、「第三のもの」という考え方は遠藤自身の建築論の基盤であり特徴になっているのではないかと考えた。

### 3. 自由学園明日館の家具—椅子についての分析と考察

自由学園明日館（1921-26）のテーブルと椅子は、遠藤による設計である。甲板と座面（図2-A,B）が「建築美術」の図（図1-B）と非常に似ている。これらの家具は、「第三のもの」を発表する4年前の作品である。この時点で、すでに「第三のもの」の着想があったのではないかと考えた。

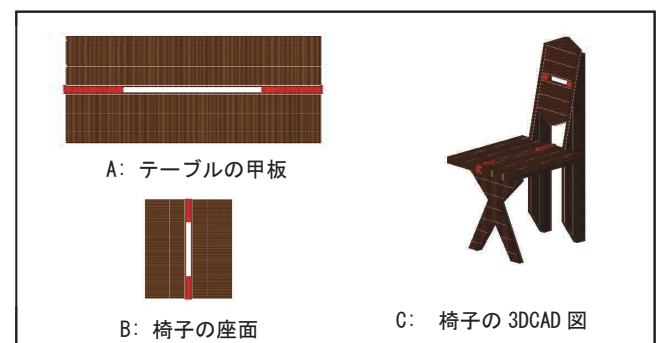


図2 自由学園明日館の家具

そこで、椅子を実測<sup>2)</sup>し、部材ごとに3DでCAD化した。「テーブルと椅子に因む」（1923）において、遠藤は、設計手順をのべている。<sup>3)</sup>その記述に沿って段階ごとに構成を調べ、「第三のもの」を読み解くことを試みた。（図3）その結果、一つの部材に「第一のもの」から「第三のもの」までの役割が重複していることが分かった。また、「第三のもの」には繋ぎ支える役割と装飾としての役割があるといえる。

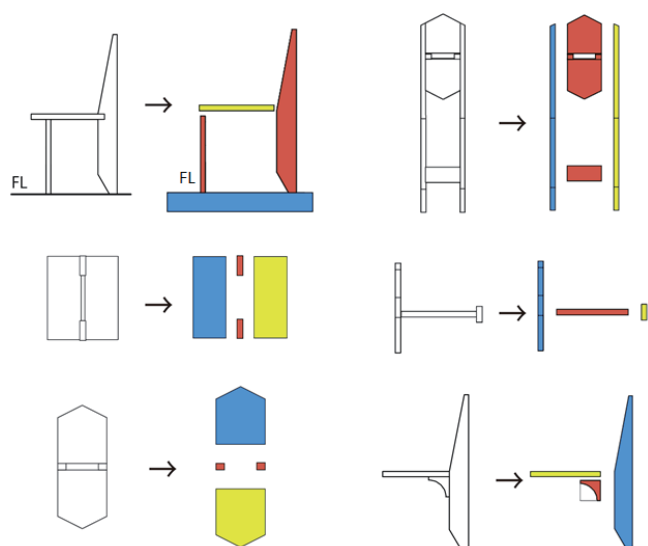


図3 椅子の分析

#### 4. 「第三のもの－夏帽子」から見た山邑邸の屋根の分析

遠藤は「第三のもの」の事例を衣類にも発見しており、夏帽子はその一つである。(表2)「第一のもの」は楕円形の鉢、「第二のもの」は水平の鰐、そして、「第三のもの」はリボン、つまり装飾としての役割をもっているという。

一方、山邑邸(1924)について、共同設計者の南信(1892-1951)は、屋根の造形を、まさに「夏帽子」にたとえている。

「デザインの基調になった形は夏帽子の如き屋根の形である。その鰐が底となりその頭が陸屋根の手摺となる。帯飾りには大谷石を主体としたコンクリートの型抜きを張り付ける」<sup>4)</sup>

「第三のもの」発表の2年前、すでに遠藤は、南と「夏帽子」からの発想を共有して設計を進めたと推察される。

西立面図より、屋根が「第一のもの」、底が「第二のもの」、そして装飾が「第三のもの」と読み取れる。

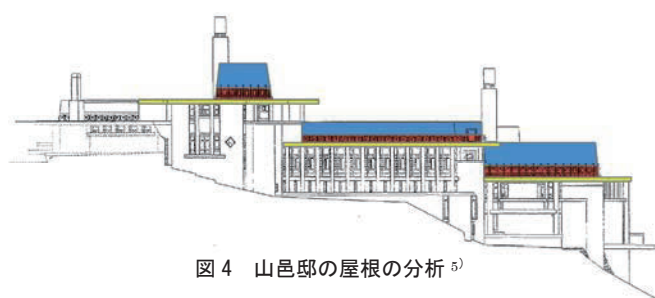


図4 山邑邸の屋根の分析<sup>5)</sup>

#### 5. 帝国ホテルと甲子園ホテルの屋根の比較

山邑邸と同様に、屋根の分析を行う。帝国ホテルでは瓦屋根の部分「第一のもの」、底を「第二のもの」、その間を「第三のもの」と考えた(図5)。さらに、瓦屋根を「第一のもの」、底との間を「第二のもの」とし、その間の装飾を「第三のもの」と考える(図6)。

一方、甲子園ホテルは図5のような分析ができる。しかし、帝国ホテルの図6にみられる装飾が甲子園ホテルにはない。その代わりに二重瓦がある(図8、図9)。



図5 帝国ホテルの分析①<sup>6)</sup>

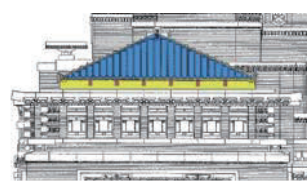


図6 帝国ホテルの分析②<sup>7)</sup>



図7 甲子園ホテルの分析①<sup>8)</sup>

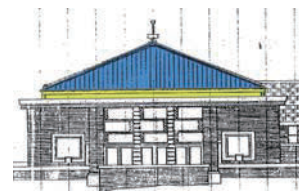


図8 甲子園ホテルの分析②<sup>9)</sup>



図9 甲子園ホテルの屋根

#### 6. 結論

遠藤は、生活環境全てに「第一のもの」、「第二のもの」、「第三のもの」の構成を見出している。「第三のもの」には繋ぎ支える役割と装飾的な役割がある。しかし甲子園ホテルの特徴を示す屋根では、「第三のもの」よりも二重瓦で「第一のもの」を強調することが分かった。この表現は「第三のもの」という考えから自ら離脱した証ではないかと考えられる。そこに、遠藤の装飾に対する新しい考え方や独自性の展開があったように思う。

#### 注及び参考文献

- 1) 遠藤新: 建築美術, アルス大美術講座(下巻), アルス, 1926, p.14, 15
- 2) 自由学園明日館のご厚意による
- 3) 遠藤新: テーブルと椅子に因む, 婦人之友, 1923.6
- 4) 南信: 山邑邸解説, 新建築, 1925, p. 11, 1.27
- 5) ヨドコウ迎賓館案内パンフレット, (2015/8/19)
- 6, 7) 明石信道, 旧帝国ホテルの実証的研究, 東光堂書店, 1994, p.170
- 8, 9) 遠藤新建設創作所(推定)「甲子園ホテル新築設計図」, 1929.5.28